

雨のちお前。

霜月 こはく

昇降口を出た色とりどりの傘が、次々と校門の向こう側へ消えてゆく。川の流れみたいに、ぞろぞろと。だからだろうか。そうやって動いているものの中に、ぽつんと止まっているものがあると、やけに目につくのだ。そう、例えば——薄暗い雲を眺め、ぽけーっと突っ立っているアイツ——風の背中とか。

「なあ。傘は？」

地面を左脚のつま先でとんとんしながら。一応聞いてはみたものの、正直答えは分かっている。

「忘れた」

「んじゃ財布とかは？」

「ない」

あまりにも予想通りの返答が返ってきて、溜息をつく。なんでそんな堂々とできんだ。

傘もないし財布もない。どうしようもない。いや、もし仮に財布があったとして、傘を買いに行くまでの道のりで濡れるか。

「……ほら。入れ」

傘の下ハジキを外し、ばさりと一気に開く。途端、ぱつと目を輝かせる風。

「え、いいの？」

「どうせ帰る方向一緒だろ」

「やった！濡れなくなかったんだよねー、僕。ありがとう」

濡れたくないのなら尚更事前に準備しとけよ。口には出さず、さっさと歩き始めた。

そのまま校門を出て、横断歩道を渡って、分かれ道を右に曲がって。ぽつぽつ、雨音みたいに途切れ途切れの会話を続けていた。主に風がどうでもいいことを話して、こちらはただ適当な相槌を打つ係だったが。そしてその間、彼の視線が傘の手元に注がれているのにも気がついていて。学校を出て時間が経てば経つほどに、眉間に皺が寄ってきている。

「……それ、僕が持つよ」

「いい」

「でも、入れてもらってるんだから」

「……」

「僕が持つ」

「……わかったよ。ほら、頼む」

こうなったときはもう何を言っても無駄だ。諦めの顔きと共に、傘を差し出す。うわあ思ってたよりも重い、とかなんとか言いながら、腕と傘をふるふる震わせて。流石の彼も傘ぐらいはちゃんと持てるらしく、すぐに安定したが。——明らかに傾けすぎな角度で。

「……傘」

「うん？」

「右側めっちゃ濡れてんだけど」

「あ、本当だー。ごめん」

間延びした呑気な声での謝罪。本当に悪いと思ってるのか？　と言いたくなるところだが、多分これでも誠心誠意謝っているのだろう。証拠として、彼のふわふわの髪がぺちゃんこになっている。あ、それは雨のせいだ。

「別に、無理して持たなくてもいいのに……」

変なところは律儀なんだよな。肩についた水滴を払いながら、今度こそちゃんと雨よけとしての機能を果たしてくれているそれを見上げて。

「……雨、強くなってきた」

その言葉に、小さく頷く。さっきまでのがぼつぽつだったなら、今はぱちぱち位だ。雲は厚みを増して、その分視界は灰色に染まってきていた。いくら傘があるとはいえ、完全に雨を防げるわけではない。後ろでまとめた髪に触れてみると、案の定毛先が湿ってしまっている。家に帰ったらドライヤーしねえと。いや、いつそのこと風呂入るか？　くるくると毛先を弄りながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。だから、すぐそこまで迫ってきていたらしい澱みには、全く気が付かなくて。

「あ！」

風の突然の大声に、何かかと目を走らせた。理解する間もなく、思いつきり片腕を引っ張られる感覚。あまりの力強さに体の重心がぶれ、脊髄反射的に脚を出し――。

「……っわ！」

ばしゃん。勢いよく水たまりに突っ込んだ。

右の靴が完全に埋まっている。歪な丸の下真ん中をぶち抜いている。冷たい。

「……っ！」

ずき、と一気に右脚を持ち上げ。泥水が滴った。少しでも水気を飛ばそうと、見えない敵に蹴りを入れる要領で一回、二回、三回。水の力を纏った脚が放つキックは、通常のそれよりも威力が高いに違いない。

「ご、ごめん！」

あわあわと頭を下げられた。なぜ謝られているのか。『僕が腕を強く引きすぎたせいで……』とか、そんな感じのことを思っただろうか。ぼんやりしていたこっちが完全に悪いのに。強いて言うなら、掴まっていた二の腕が若干痛んでいるぐらいだ。

「謝んよ。むしろ、ありがと」

「……どういたしまして……？」

形だけの返答をしながらも、やはり納得していない様子の風。不器用ながらも助けてくれようとした。結局水たまりは回避できなかったが、気持ちだけで十分だ。

視線を足先に落とした。クリーム色だったはずの靴は、チョコレートでコーティングされたみたいになっちゃっている。おそらく左足は無事だろう、と思っていたのだが。水たまりに浸かったときの飛沫か、はたまた脚を持ち上げた拍子にか。左右間での被害状況は、どんぐりの背比べ状態だった。けど、まあいい。

同じく、どろどろになった靴を凝視していた風。ふいに顔を上げた。かと思うと、決意に満ちたみたいな、謎な表情で歩き出して。傘の守備範囲から外れぬよう、慌てて歩幅を合わせる。

「決めた」

「何？」

「明日、いっしょに靴買いに行こう。新しいやつ！」

足下をじっと見つめてきていたのは、そんなことを考えていたからか。責任感が強いというか、お人好しというか。

「いって。帰ってすぐ洗えば綺麗になるだろ」

「あ、そっか。……明日までに乾くかな。よかったら僕の靴、貸そうか？」

「いや、貸してもらったところでサイズが違いすぎるだろ」

「えーと、じゃあ——」

その後も、彼は微妙にズレた提案を続けた。靴下を二枚履けばいいとか、うちわで仰いで靴を乾かすとか。どうやったら思いつくのか、と半ば呆れながら一つ一つにコメントしていき。そうしているうちに、風の家の前に着いた。

ばさばさと傘を開閉し、水を飛ばした風。いつの間にか雨は止んでいて、適度に冷気の含まれた心地のよい風が頬を撫でた。

「今日、いっしょに帰ってくれてありがとう」

「別に今日だけじゃねえだろ」

「ううん、傘の方。入れさせてくれたから」

はい、と差し出されたラベンダー色。丁寧に畳まれた傘を受け取りつつ、やっぱ風は律儀だ、と改めて思った。

「あと、靴、ごめん」

「いって」

眉を下げて、未だに申し訳なさそうにしている風。自然と笑みがこぼれて。

「じゃ、また明日」

「またねー」

ひらひら手を振る彼に、軽く手を振り返す。玄関へ入っていくのを見届けた後、傘の柄を持ち直した。ついさっきまで風によって握りしめられていたその部分。春の日だまりのような温かさが残っていた。首元の赤色を、きゅつと正面に向け直す。帰るか、と、私は緩やかな一步を踏み出した。

翌日の朝。風から、あるメッセージが届いた。

『傘をずっと持ってたせいで右手が筋肉痛になっちゃった』

私は、その日のうちに筋トレメニューを作成した。